SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

わかり合える楽しさを感じて：6年3組Q男君との営みから((2)本年度の教師おこし委員会の取り組みの重点)(研究の基盤となるもの：教師おこし委員会より)(IV 教師おこし編)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 杉浦, 元昭 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000106

わかり合える楽しさを感じて

― 6年3組　Q男君との営みから ―

6年3組　杉　浦　元　昭

「ふーん、今言ったこと、Q男君らしくないよね。今まで絶対に正しいことをやろうとしてきたことと違うんじゃないの？」そういたずらっぽく笑いながら話す私に、Q男君は照れ笑いを浮かべ「まぁ、いろいろあるさ」と答えた。『休み時間に野球をしてはいけない』というきまりを破ったことについて、彼と話す中での会話だった。

卒業を前にした今、彼にそんな言葉を言えることや、彼が自分の失敗をさりげなくかわす心のゆとりをもっていることが嬉しい。なぜなら、私自身が、知らないうちに子どもを型にはめ込もうという思いを捨てることができていたと感じられたことと、Q男君が正義感を通す大切さだけでなく、時にはそこに縛られない気楽な気持ちをもてたことが、二人にとっての6年間の成長だったからだ。

1．Q男君との再会の中で

5年生の始業式。担任発表を終えて子どもたちの前に立つ私の目に真っ先に映ったのはQ男君のにっこりとした顔だった。2年ぶりの担任を喜んでくれていたのだ。

彼の笑顔に、入学時の姿が重なった。入学直後、彼は、自分が言いたいことを言って、相手に嫌な思いをさせてはいけないと考えていた。当然な考え方ではあるが、伸び伸びと自分の思いを主張している子どもたちが多い中で、私は彼の考えは堅苦しいように感じた。彼はきっと、友達が言いたいことを言い、やりたいことをやろうとしていることを理解できず、悩んでいたのだろう。

1年生のある日、下校途中に、Q男君は友達と言い争いになった。言いたいことだけを言って、相手を傷つけても、何の解決にもならないと考えているQ男君は、友達の激しい口調に言い返せずに泣いて学校に戻って来てしまった。彼が言いたいことを言えることを私は願っていた。しかし、彼は、友達と穏やかに生活したいと考えている。そんな彼に、もっと耐えるように強くなれということを願うのか、友達の言葉を気楽に聞き流せる心の広さを求めるのか。それとも、彼が強く自分の思いを主張していくことを願うことがよいのだろうか。そう悩みながら、彼が泣きやむまで、ずっと話を聞いた。しかし、彼の気持ちは話を聞いてもらうだけでは晴れない。自分に何ができるのだろう。私は、言葉を選びながら、もっと気楽に考えればいいことを話した。今、主張しろということは無理だし、強くなれということは、何が強さなのかを説明しても、納得は得られないと考えたからだ。そんな私に、「僕の考えが間違っているの？」と彼は問い返してきた。もっと気楽に考えることが大切だと話す私の心中には、彼が大切にしていること否定しているのではないかという後ろめたさを感じないではいられなかった。

もっとわがままを言ってもいいんだよ。お互いがぶつかっていくことが大切なんだよ。その中で、互いのよさも分かり合えるんだよ。傷つけ合ってはいけないと考える彼に、そう願うのは間違いなのだろうか。しかし、周囲の子どもたちが、ぶつかっていくことによって納得し合う結論を見出していく姿を見るにつけ、彼には気楽さとともに平然としていられる強さを、そして自分の思いを語っていくことを願わないではいられなかった。

そんな彼も、2年生になると、自分の思いを出すようになってきた。私が友達の思いを聞いたり、彼の思いを聞いたりして、話をつなぎ合わせる関わりもしてきた。その中で、彼自身も自分の思いを主張できるようになってきたのだった。彼に願ってきたことが、少しずつ成果として表れていたのかと感じた2年間だった。

再び担任することになった私は、彼の笑顔を見ながらそんな2年前の営みを振り返っていた。彼の笑顔は長くは続かなかった。友達と遊んでいるQ男君は、とてもいい表情をしている。しかし、授業中の表情はさえない。言葉を選んだり、言いよどんでしまったりしながら発言している。友達のことを気にしながら、距離をおいているようだ。彼の中で、新しい学級をうまく受け入れることができないのだろう。しかし、彼が学級のどんなことを受け入れられないのかがはっきりしなかった。

2．正義感は自分の思いを伝えないことか

5年生前期が終わりかけた時、彼は「もう我慢ができない」と、私の研究室に来て泣き出した。話を聞くと、夏休みから9月中旬にかけてヨーロッパに行ったことで、友達にいじわるをされているというのだ。学校を休んで旅行したことをうらやましく思った友達が、彼をからかっていたらしい。

からかっていた友達を呼び、Q男君の思いを話させた。からかっていた友達もうらやましかっただけであり、素直に謝ったため、Q男君も安心したようだ。

友達のことを先生に言えば告げ口になるようだし、友達と言い争いはしたくない。だから自分が我慢をすればいい。彼は、自分の思いを口に出そうとはしなかった。

しかし、友達とのこの一件が、彼の表情を暗くさせていたのではない。そんな悩みさえもなかなか言い出せなかったことには、まだ何かがあるはずだ。友達と少し距離をおくことで、平静を保ってきたことが限界にきているのかもしれない。友達と付き合う中で、自分の思いを強く言ってはいけないという姿勢が、再び彼の中で壁になっているようだ。その壁は彼の正義感につながっている。しかし、その壁を自身の力で乗り越えていかなければ、明るい表情で過ごせない。低学年の時は、私が友達と彼との間をとりもつことで、彼は自分を語り始めた。今度は自分の力で解決していってほしいし、その力をもっていると信じていた。

5年生の終わり、楽しそうに遊んでいながらも、やはりすっきりはしていない彼がいた。彼が冬に足を骨折したため、友達が彼の手助けをしている姿を数多くの場面で見かけていた。今、友達が支えていることを強く感じている彼なら、そんな友達に対して自分の気持ちを素直に表現していっても大丈夫だと思えるのに、なぜなのだろう。私は日記のコメントに、友達と自分を比較するのではなく、Q男君のよさを出せばいいこと、素敵な友達がたくさんいるし、彼らだったらどんなことでも受けとめるであろうことを語りかけたのだが、やはり今ひとつ、彼の表情はさえないのだった。

3．自分が言わなければいけない

6年生になると、一部の子は活発に発言するものの、なかなか思うように意見を出し合うようにはならなかった。これは、女子がグループを作り、互いに反発することに起因する。

その雰囲気を何とかしたい、このままでは楽しくないという声が数人の女子からあがってきた。何とかしなければいけない。しかし、担任が押しつけがましく仕切ることを嫌がる女子もいた。私が互いをとりもって話し合っても、女子の友達関係などの不満が噴出するか、沈黙が続くかのどちらかになってしまうだろう。そんな私の悩みを、数人の男子に話した。Q男君もその中にいた。「今の女子の雰囲気はよくないし、普段は勝手なことは言っても授業中には発言しないなんて楽しくない。だから、自分たちが皆に呼びかける」と、自分たちが感じていることを伝えることになった。正義感が人一倍強いQ男君は、彼らの言葉に強く響いて、「僕も、このままではよくないと思うから、感じていることを話したい」と言った。

話し合い当日、彼は熱があったにもかかわらず、話し合いのためだけに登校してきた。様々な不満を述べ合う中、互いの誤解が多いこともはっきりしていた。Q男君は「女子がこそこそと陰で悪口などを話すことが嫌だ。互いのいいところを見ていけばいい」ときっぱりと発言した。彼が1年以上抱えていた、友達に対するぼんやりした不安や戸惑い。それらが、言葉に表れていると感じた。互いのいいところを見ていきたい。それが、彼が大切にしていることだ。やっと彼が自分の思いを語り始めたと感じた。

いいところを見ていけば、互いが楽しく生活できる。そんなふうにみんなが見方を変えられれば、気持ちよく過ごせるはずだ。子どもたちも頭ではわかっているのだろう。ただ、気持ちの上でなかなか整理ができないのだ。彼が感じていることは、みんなも感じている。それが、少しずつ学級の雰囲気の中に感じられるようになったのが夏休み後だった。

4．友達の思いを大切にしたいから主張するんだ

相手の立場を深く考えてきたQ男君を、また悩ませる問題が発生した。修学旅行の部屋割りだ。宿泊はツインルームのため、2人か3人組を組まなければならない。しかし、U男君が誰とも組めない。

Q男君とU男君とは6年間同じ学級だった。U男君は、思ったことをはっきり話す子だ。低学年の頃に、Q男君はそんなU男君に何も言い返せずに泣きじゃくっていたことが多かった。しかし、6年間の付き合いの中で、U男君のよさもいっぱい感じている。Q男君が組んでもいいのだが、彼は組むとは言えなかった。一緒に組んでいる友達が、U男君とうまくいかないと感じていたからだ。

そんな男子の行き詰まった状態の中で、なぜU男君が受け入れられないのかをはっきりさせたいという声があがってきた。様々な活動では孤立することがないU男君なのに、今回は受け入れられていない。U男君のよさはわかっていても、思い出に残る修学旅行だけは一緒に行きたくないのだ。U男君には辛いだろうが、U男君に対する不満を出させなければ前に進めない。不満を言いっ放しにするのではなく、それを共に解決しようと努力する子どもたちである。男子と私で、なぜU男君を受け入れようとしないのか、どうすれば部屋割りが解決するのかを話し合おうとした。

その話し合いを一部の子が提案した時、Q男君は「U男君の嫌なことを話しても何の解決にもならない。そんな話し合いをしてはいけない」と主張した。それは、Q男君が4年生の時に友達に自分の思いがわかってもらえなくて、39人対1人で孤立してしまった深い悲しみがあったからだとも言う。そんな心の痛みを彼がかかえ、それがすっきりしない表情でいた原因であったのかとも思った。友達も、彼の言葉に、反論をしばらくしなかった。しかし、部屋割りが決まらないことはどうしようもない。U男君も自分が悪かったのなら、そこをはっきり言ってほしいと語った。

2日間かけても、誰もQ男君を説得することはできなかった。私も、日が迫っていることから、話し合いを進めようとQ男君と話し合ったが、絶対に何の解決にもならないと彼は言う。その強さに、私自身驚いてしまった。人を傷つけてはいけないという正義感のために、自分の思いを貫き通そうとしているのだ。「Q男君の言っていることは分かる。それでQ男君がU男君の嫌なところを言いたくないのならいいから、不満をもっている人に言わせてほしい」と何人かが言い出した。そこを通らなければ、U男君もU男君を受け入れようとしない男子も納得できないはずだ。多くの男子と私に押し切られた形で、なぜ受け入れられないのかを男子は話し出した。

Q男君同様に嫌なところを言わない子が何人かいた。言わない理由を聞いてみると、傷つけ合っても何の解決策も生まれないと答えたり、みんな欠点をもっているのだからU男君だけを攻めるべきではないと答えたりした。また、「最近、やっとU男君といい関係になってきたんだよ。嫌なところを言ったら、また戻ってしまうじゃん」と、私が考えていた以上の思いやりをもった言葉が返ってきた。

言いたいことを言えばいいと考えていた私。しかし、子どもたちはもっと深いところで考えていたのだ。黙っていても互いの欠点を認め合ったり、よさを見つけそれを大切にしたいと考えていたりしていた。そんな考えは、Q男君と私や男子との2日間のやりとりの中から生まれてきたのかもしれない。それにしても、なんて素晴らしい考え方ができるのだろう。

話し合いの結果、U男君が気づかなかったみんなが嫌だと感じていた部分についてははっきりした。しかし、部屋割りは決まらない。Q男君が言ったとおりだったのかと、結果が得られないことに焦りを感じ始めた。

Q男君は、友達を回って、それぞれがどういう気持ちでいるのかを尋ねていた。友達と争いたくもないし、争っている姿も見たくない。とにかく、みんなで楽しく修学旅行に行きたい。それが彼の強い願いだ。友達の思いを大切にしながらも、自分の思いをはっきり伝えている。U男君だけが悪いの

ではなく、みんなが互いに組みたい人と組みたくない人がいるから、U男君が一人になっているのだ。だから、U男君の嫌な部分を言ったことに対して、全員が考えなくてはいけない。みんなが一緒に悩まないのはおかしいと男子に向かって言った。人を傷つけてはいけないという正義感が、自分の思いを主張する彼を支えていた。

その姿を見て、一緒になってもいいと言う友達が現れた。他の子どもたちも、私も、絶対にU男君とは組まないだろうと思っていたほど互いに仲が悪かった子だった。そこまで彼の気持ちを変えたのは、私の関わりでも、U男君の嫌な部分を話し合ったことでもなく、Q男君の頑強なまでの姿勢だった。また、Q男君が他の友達に働きかけていた姿も、多くの友達の心を動かしたはずだ。自分の思いを主張することはいけないと考えていた彼が、友達のことを思って主張した。そんな姿がとてもまぶしく、心から修学旅行を楽しもうとする姿を嬉しく思った。

5．卒業を前にして

冬休み明け、Q男君からメールが入った。「このごろ、朝、みんなとよく遊びます。みんなといっても、一組や二組や自分のクラスの友達と遊びます。なんでこんな、ちっぽけなことで書いたかたというと、前よりも、いろいろな友達と遊べるようになったからです。(以下省略)」外で遊ぶのが大好きな彼が、改めてこんなことを書いてきた。しかし、彼自身が書いているように、「前よりもいろいろな友達と遊べる」ということが、彼にとってとても大きなことなのだ。以前感じていた友達との距離がぐっと縮まってきたことを実感しているのだろう。

「いろいろな友達と遊べることって、何もちっぽけなことではないと思います。だって、Q男君の6年間を思い起こしてみれば、いつもハッピーだったわけじゃないでしょ？そんないろいろな出来事を乗り越えた上で、今、たくさんの友達がいるんでしょ。とても素晴らしいことじゃないですか。(以下省略)」そう返信した意味を、彼なら受けとめてくれるだろう。

彼が自分の成長を自覚していることが素晴らしいと感じられると共に、6年前に願っていた彼が自分で切り開いていく姿を実現していることを嬉しくも感じられたのだ。

2月半ば、5年生から、「6年生が休み時間に野球をやっているのはおかしい」と苦情が来た。何人かの男子がプラスチックバットとゴムボールで野球をやっていたらしい。Q男君もその仲間にいた。休み時間の野球は危険だから禁止しようと、前年度の代表委員会で決定されていた。Q男君もその会議に出席していた。彼は野球を禁止することには反対したものの、多数決で決まったきまりだ。

「自分が出席した会議で決まったことを守らなくてもいいの？」と、尋ねると、「いやぁ、野球じゃなくて、ゴルフだったし……。僕は会議では反対していたんだし……」と、仕方がなかったのだと懸命に言い訳をする。

「ふーん、今言ったこと、Q男君らしくないよね。今まで絶対に正しいことをやろうとしてきたことと違うんじゃないの？」そういたずらっぽく笑いながら話す私に、Q男君は照れ笑いを浮かべ「まぁ、いろいろあるさ」と答えた。「そうなんだ。自分の今までの生き方を否定するわけね」と、にやっと笑って彼をからかうと、「そんなことないけどさぁ」と言って、走って逃げてしまった。私は、彼らがやった行為はよくないと思いながらも、問い詰めるつもりはなかった。むしろ、日々友達と楽しい遊びを工夫し、友達とのつながりを大切にしようとしてることを素敵に思っていた。

その後、昼休みに5年生に謝りに行って戻ってきたQ男君たちは、「謝ってきたよ。あーあ、疲れた。さぁ、野球でもやりに行こうぜー」と、笑いながら教室を飛び出して行った。もちろん、彼らは野球などしない。私の反応を楽しみたくてからかったのだ。

明るい声と共に走り去る彼らの後ろ姿を、安心して見送る自分の変化は何だろう。約束を破ったら、徹底的に叱り、正しい道へ導こうとしていた自分だった。自分の言いたいことは伝えながらも、子どもと私と相互に分かり合っていることがある安心感があるから、許せるのだろうか。Q男君たちが、自ら気づき、成長していくと心から信じているからこその関わりかもしれない。今度は、Q男君の笑顔に、自分の子どもへの関わりを考えさせてくれたことに感謝の気持ちを込めて笑顔を返そう。